

スペイン・メヒコ雑感

安村 直己

10月も半ば近くだというのに30度を超す暑さが続いていた。セビーリャに着いて下宿を決めると、先輩のA氏と共にセビーリャ大学の経済学部を訪れることにした。マドリード自治大学の近藤仁之教授に、同学部のアントニオ・ミゲル・ベルナル博士に会うようにといわれていたからである。ベルナル氏の研究室に迷ったすえに辿り着くと、スペインでは珍しいことではないが意思の疎通がうまくいってなかったらしく、彼はわれわれの訪問について知らされていなかった。にもかかわらずわれわれを気軽に迎えてくれ、小一時間にわたってセビーリャにおけるアメリカ史研究の現状について説明してくれた。A氏と私がそれぞれ理解しえた部分をつなぎあわせてベルナル教授の話を再構成すると、大体次のようになる。—セビーリャ大学のアメリカ史学科はフランコ独裁下、スペインの帝国としての過去を発揚するという目的に沿う形で再編され、そのイデオロギーに異議を申し立てる者はつぎつぎに追放されていった。その結果、そこでの研究は量的な拡大にもかかわらず、質的には見るべき成果を生むことなく今に至っている。—

ここではスペインおよびメヒコ（日本ではメキシコと呼ばれている）での二年間の留学中に学んだこと、感じたことを、記憶を辿りながら書いていくことにする。私の研究テーマはスペイン領アメリカ、より具体的にはメヒコの植民地時代史であるから、それをめぐる研究が両国においてどのような視点からすすめられているか、が中心となろう。本題に入る前に一つ明らかにしておくべきことがある。それは、これが公平な見地から為された網羅的な学界動向リサーチなどを目指しているのではなく、冒頭で述べたベルナル氏の言葉を自分なりに検証していったプロセスを跡付けるものに過ぎない、ということである。あくまで私の個人的な感想文と思って読んでいただければ、それで幸である。

A氏と私はセビーリャ大学地理歴史学部アメリカ史学科の博士課程に入学する予定となっていた。が、11月末にならないと講義が始まらないということで、われわれはアメリカ史研究の拠点の一つ、インディアス総合文書館に入ることにした。A氏はペルーで文書を扱った経験を有していたので、早速目当てのセクションの史料の解説・収集にとりかかった。古文書学のイロハをかじっただけだった私はそんな氏を横目にしながら、すでにセビーリャ大学の研究者が引用していた史料を練習を兼ねて判読していくことにした。文書館の開館する朝八時から閉館する午後三時近くまでそれぞれの文書に没頭し、スペイン流の遅い昼食の後は、国立イスパノアメリカ研究所の図書室で夜八時近くまでセビーリャ学派の研究書を読み進む、という日々が続いた。朝、下宿を出てグアダルキビル川にかかる橋を渡り始めると右手に、新大陸貿易の発着所の脇にある黄金の塔やイスラム支配の置き土産であるヒラルダの塔が見え始める。それらが日一日と遅くなる朝日のなかで暗いシルエ

ットを浮かべるようになり、川面をわたる風が冷たくなる頃には、ようやく私も史料を扱えるようになっていた。

それからというもの必要とする文書を自分で探し出し解説する、あるいは予想もしていなかったところで興味深い史料に出会うという楽しみ、いつまで経っても目指す獲物が現れないときの焦燥が私の日々の気分を左右することとなった。それにつれてセビーリヤ学派の研究書を紐解く機会は減っていった。それはベルナル教授の言葉が自分なりに納得できるようになったからである。まず気付いたのは、セビーリヤ学派の研究に共通している悪しき文書至上主義である。これは幾通りもの形をとって顕現する。文書に書かれていることを集成してそれで研究と称している場合も少なくない。私が最初に読んだ、18世紀半ばメヒコ北部で生じたインディオの反乱についての“研究”はその典型であった。反乱の原因、鎮静化の功績をめぐる世俗の役人と聖職者の報告は多くの点で相違を示しているばかりか、いくつかの事例に関しては真っ向から対立している。にもかかわらず、著者はこうした証言を平板に並べるだけで、従って読者は実際に何が起きたのかすら分からないまま取り残されることになる。読者の側には二系列の証言のいずれを信ずるべきかを判断するための第三の史料は存在しないから、あとは推測するより他はない。著者は“歴史家”としての立場を崩さないから、推理小説とは違って最後に謎解きをしてくれるほど親切ではないからだ。彼の歴史研究のもう一つの特徴は、反乱の主体であるはずのインディオにまったく主体性が付与されていない点であり、従ってそこから歴史人類学的研究へと発展するような見込みは見られない。これはセビーリヤの歴史研究に共通している要素であり、後に詳しく論じることにしてしよう。

文書至上主義の悪弊は第二に、研究テーマの選択がセビーリヤにある史料に絶対的に規定されてしまう点にある。ブローデルの唱える全体史は一個人の研究対象とはなりえないから、特定の地域のある時代をいかなる視角から解明していくのか、は一歴史研究者にとり出発点において直面しなければならない問題であるはずである。別のいい方をすれば、研究者個人の主体的問題関心がまずあり、そこからテーマが選択されていくべきである。ところが、日本の研究者にとっては自明の公理ともいうべきこの発想がセビーリヤ大学アメリカ史学科には通用しない。ある地域に関するまとまった史料群が見つかるとそこについての記述的な学位論文ができあがる、というのが通常のパターンである。時期の選択もまったく同様で、文書が見つかる年から見当たらなくなる年の間が対象となる。こうした傾向を如実に示しているのが、ある地方の歴史を植民地行政の長、あるいは司教の在職期間に輪切りにして扱っている一連の研究である。その中では史料に現れた範囲内で当該社会の諸側面への言及がみられるけれども、それらを歴史の変遷の中に位置付けて理解することは時代設定の段階で排除されてしまっている。では、短いスパンをあえて選ぶことによって、高速写真の一コマが肉眼にはとらえきれない動きを可視的なかたちに固定するように、錯綜とした諸要素を共時的-有機的な連関として再構成することを目指しているの

だろうか。残念ながらこうした志向も欠けているのが通例で、そこには年代毎に断片的な諸事実、正確にはそれらについての文書作成者の解釈が並んでいるにすぎないのだ。問題意識の欠如と豊富な史料の存在は空間的にも年代的にも関連のない研究の不断の増殖に帰結する。

では何故にこうした事態がセビーリャのアメリカ史学界で生じたのか。これに答えるには彼らの研究をいくら読んでもダメで、彼らの間の実際の人間関係、特に政治的背景を知る必要がある。ベルナル博士の経歴はこの点で示唆的である。彼はアメリカ史学科の出身で、セスペデスという教授の指導を受けていたが、セスペデスはカルデロン・キハーノとの主導権争いに敗れてセビーリャを去ることとなった。これは学問上というよりは政治イデオロギー的な性格の色濃い争いであり、当時のフランコ体制のイデオロギーにより親和的なカルデロン・キハーノが勝利を治めたのである。マルクス主義者であったベルナル氏がアメリカ史学科にいられなくなったのは当然の成り行きであった。彼はスペイン近代経済史に方向転換し、その分野で一流の業績を積み重ねてセビーリャ大学経済学部の教授の座を占めるにいたったのである。最近ではアメリカ史学科とは一線を画しながら、アメリカ植民地貿易の推移とスペイン経済の動向の間の相関を明らかにする作業に乗り出している。これは追放された側のベルナル教授が語ったことであるから一面的であるかもしれない。しかし少なくとも現状の解明に一定の光を投げかけてくれることは間違いない。

カルデロン・キハーノ博士がアメリカ史学科の主任教授の座に就いたのがいつ頃なのかは確認していない。しかし現在の同学科の教授陣の大半は彼の薫陶をうけた第一世代とみなしうる。博士のアメリカ史研究に対する態度は、彼自身の研究あるいは彼が推進した共同プロジェクト、指導した学位論文への序文などから窺われる。彼はスペインの帝国としての過去の栄光を空虚な言葉で飾り立てるようなことはしない。一次史料に立脚した“客観的”な方法でもって帝国史を再構成することにより、自国の歴史に対する誇りに学問的根拠を与えることを目指しているのである。この立場がセビーリャのアメリカ史研究のあり方を基本的に規定してきた。その問題性は目的そのものが客観性を損なわせることに通じることにある。スペインによる征服、植民活動は、後続のヨーロッパ諸国や日本の場合と同様に、征服された側に計り知れない災厄をもたらしたのであるが、それはカルデロン・キハーノ氏にとっては存在しないのである。帝国の歴史はスペイン統治者の不断の努力と進歩の歴史として描かれることになる。スペイン帝国の栄光を信じていたセスペデス博士が追放の憂き目にあったとすればそれは、帝国崩壊の一因を植民地社会の利害を無視したスペイン本国の植民地政策の不適切さに求めようとしたことが、カルデロン・キハーノとの対立点となったと考えられる。

セビーリャ学派　— 上述したことから分かるように正確にはアメリカ史学科と限定すべきだが— の個別研究に問題意識が欠けていることにはすでにふれた。しかしながら、それらを全体としてみると、そこにはテーマに関して一定の選定基準が存在していることが

分かる。具体例に即して説明していこう。ヌエバ・エスパーニャー植民地時代のメヒコの呼称であるーにはスペイン王室の独占ー専売政策が導入され、その品目は18世紀に入ってから増大する。それらの中で、銀の精練に欠かせない水銀、あるいは火薬、醸造酒、トランプ、黒人奴隷などについて、王室歳入の変動、ひいては本国から見ての植民地行政の効率性を明らかにするという視点から一連の研究がなされてきた。また海港の防衛、軍制改革をめぐる問題を、帝国の一体性を軍事的に保障するためにとられた本国の政策の実施例として実証していく研究が帝国各地方に関して進められている。他方で、スペインのアメリカ植民地領有の正当性の法的根拠であるキリスト教の布教活動についても、各地の教会をインディオの福祉を増進することに努力した団体として描き出す一群の研究が生みだされてきた。これは残された文書の量の如何という偶然によって生じたのではない。このテーマ選定にみられる傾向は、主任教授としてアメリカ史学科に長年君臨してきたカルデロン・キハーノによる、アメリカ史研究の帝国史研究としての把握、ないしは位置付けの結果なのである。セビーリャ学派というものが単なる地理上の呼称を超えて存在しているとすればそれは、カルデロン・キハーノ博士の問題意識が諸々の研究を貫徹していることによるのである。個々の研究者には、彼が大きなキャンパスにあらかじめ書き記した素描の一部をなぞりながら部分を仕上げる仕事だけが残される。セビーリャでアメリカ史研究者としてやっていくつもりであれば、全体の構想に異議を唱えることなどは出来ない相談なのである。逆説的だが、カルデロン・キハーノの問題意識、使命感の遍在こそが、個別研究における問題意識の欠如をひきおこしたともいえよう。

帝国史としてのアメリカ史の把握はその枠組みの中に、帝国支配に様々な形で抵抗を示したインディオを歴史的主体として取り扱うことができない。セビーリャ学派の人々はこれを残されている史料の性格によって正当化しようとする。確かにインディアス総合文書館の史料の大半は植民地官僚の手になる行政文書であり、そこにインディオの声が生のかたちで残されることは極めてまれである。彼らは文書至上主義をとるから、人類学をはじめとする隣接諸科学の成果を利用することもなく、支配の対象としてインディオに触れるのが歴史学には関の山だ、と行って済ませてしまう。しかし、問題意識をもって作業を進めれば、A氏がペルーのインディオの精神世界を再構成していこうとする一連の論考の中で利用しているもののように、セビーリャにもインディオの生活に迫ることを可能にする史料は存在するのである。そのことは、セビーリャ大学の文化人類学教室に集う研究者がインディアス総合文書館の史料に全く別の観点から光をあてることにより、中米のインディオに関する歴史人類学的研究を発展させてきたことから窺え知れる。アメリカ史学科の研究におけるインディオの不在は、やはりその出発点における、イデオロギー上の暗黙の前提によって規定されてきたと考えざるをえない。

ではセビーリャ学派のあり方はこのまま当分変わらないのだろうか。アメリカ史学科の主任教授の座を40才前後のラモン・セレーラ博士が占めることになったのは、なんらかの

変化をもたらす要因の一つと考えられる。博士は上述した制約の下で、18世紀後半メヒコの一地方で生じた社会・経済構造の変動を解明したすぐれた学位論文を書いており、彼の下で記述的な研究の減少、より分析的な手法の導入がみられることが予想される。けれども、研究のイデオロギー的な前提に関しては変化はもたらされないのではないかと、というのが、私と同世代の若手研究者とのつきあいを通じてえた印象である。

われわれがセビーリヤのみならずそこに集う各国の研究者と交流をもつようになったのは12月半ばのことであった。その後、セビーリヤの生活に彩りを与えるセマーナ・サンタ、フェリア、コルプス・クリスティ、エル・ロシオといった聖俗の様々な祭礼をセビーリヤの友人に案内してもらって経験したり、あるいは彼らの家に招かれたり ―これはスペインではかなりまれなことであるが― ときには各国の研究者の下宿でパーティをもったりすることを通じて、それぞれのお国柄や研究姿勢などが分かってきた。それに反比例して、文書館が閉館して以後イSPANアメリカ研究所の図書室に通う頻度は低下し、文書館に現れる時刻も次第に遅くなっていったことは否定できない。しかし、様々な国の研究者のアメリカ史に対する取組み方の違いを肌でもって知ることによって、それぞれを相対化しうる視点を手に入れることができたのは何ものにもかえがたい経験であったと思う。

ヨーロッパの研究者に共通しているのは、ヨーロッパ史に関する新しい研究成果、問題意識、手法、テーマなどに敏感である点である。自国の歴史の延長として無自覚的にアメリカ史をとらえるセビーリヤの若手研究者にはこうした傾向はあまりみられない。ラテン・アメリカの研究者には、セビーリヤ学派的“帝国主義”的史観に対して自国の歴史的発展の独自性を強調するナショナリストと、スペインの残した遺産を肯定的に評価し自国のスペイン性を全面に押し出す人々という二つの類型がみられる。具体的な研究にとりかかる以前のこうした条件付けはテーマの選択などに対し大きな影響を与えているのであり、そこにアメリカ史を扱っていても、フランス人はいかにもフランス風の、ドイツ人はドイツ風の研究を生み出すことになる。そしてまた、ラテン・アメリカの研究者の歴史研究は上述したようにいまだに大きく二分しうるのである。

セビーリヤ学派的若手研究者に話を戻すと、私が悲観的な印象を抱くにいたった理由は、彼らが帝国意識の残滓といったものにいまだに引きずられているように感じられたからである。約一年におよぶセビーリヤ滞在の後、私はメヒコに向かったのだが、そこで先に着いていたセビーリヤの友人たちと奇跡的に再会することが出来た。どこへ行くのも歩きですんだセビーリヤから東京なみの大都市メヒコ市に投げ込まれて戸惑いがちであった私は、しばらくは彼らと行動を共にすることにした。彼らは四人で、そのうち三人はアメリカ史学科の博士課程に在籍する研究者であり、文書館その他ですでに面識があった。一緒に行動していて最も閉口したのは、あれもないこれもないという不満とそれは危ないこれは不便だあれは汚いというあらさがしに満ちた彼らの会話であった。それはあたかも文明の進んだ国の人間が遅れた国にやってきたかのようであった。そこにはメヒコがそうした状況

にいたった歴史的経緯についての洞察などは全く見られず、メヒコ固有なものに対する関心も一般的な観光客の域を出てはいなかった。したがって、この滞在が彼らの歴史研究への取組みをかえることは考えにくい。彼らの示したこうした反応を規定しているものを私は帝国意識の残滓と呼ぶのだが、スペインにおける生活水準の上昇とメヒコに代表されるラテン・アメリカ諸国での低開発状況の深化に伴い、この優越感、その裏返しとしての保護者的な態度は強化される危険すらあるように思われる。四人のうちでこうした傾向を最も免れていたのは歴史研究とは無縁の女性であったことを付け加えておこう。

そんなある日のこと、メヒコ国立自治大学（以下UNAMと略す）付属歴史学研究所のあるセミナーに招かれて彼ら三人がそれぞれのテーマに関して話をするというので、私も参加することにした。その席で一人がスペイン王室によって16世紀の末に推進されたレドゥクシオンという政策について発表した。レドゥクシオンとは、散在した居住形態をとっていたインディオを行政・布教上の便宜を図るために集住させる政策である。その報告の最後で友人はこれが成功であったか失敗であったかを問題にした。それが終わるか終わらないかのうちに、セミナーの座長であるイグナシオ・デル・リオ教授が口を開いた。

「ホセ・アンヘル（私の友人の名前である）の報告はとても興味深かったが、成功、失敗というのは一体だれにとってなのか、植民地当局にとっての失敗はインディオにとっての成功であったかもしれないし、その逆もいえるだろう、歴史研究においてこうした価値判断を安易に導入するのは禁物である」客観的な歴史研究を掲げるセビーリャ学派の若手研究者の無自覚な帝国意識に対する、痛烈なコメントであった。

私のメヒコにおける留学生活はこうして始まった。住宅事情の極めて悪いメヒコ市で一月半ほど探し回った挙げ句、街のほぼ中心に位置するローマ地区にアパートを借りることも出来た。史料の宝庫である国立総合文書館まで40分、上述のUNAMの歴史学研究所までは50分、国立人類学歴史学研究所の歴史部門まで30分、コレヒオ・デ・メヒコという大学院まで一時間。私にとっては戦略上の要所であった。ローマ地区は半世紀ほど前に富裕層のために開発された、いわば田園調布のようなところで、かつての大邸宅が軒を連ねている。いまではおちぶれて、一軒につき十数家族が共同生活をしているような有様だが、静かなたずまいは失われていない。心配の種といえば、85年の震災で最も大きな被害を受けた地区の一つであり、あちらこちらにガレキの山が残っていることぐらいであった。

スペイン語の会話能力と文書判読速度が向上したことにより、メヒコではいろいろな研究者と対等な立場で話し合える機会が増えていった。これは権威主義が教授陣と若手研究者の関係を厳然と律しており、自由な討論が許される雰囲気のないセビーリャでは考えにくいことであった。様々な潮流の間で程度の差はあるだろうが、メヒコの歴史学界にははるかに高い開放性と相互批判の精神が根付いているように思われた。こうした環境の下、インディオ共同体の歴史的変遷という、セビーリャでは相手にされないテーマに焦点を絞っていた私の研究欲はいやがうえにもかきたてられていくこととなった。

さて、ラテン・アメリカの歴史研究者には大別して二つの類型があることにはすでに触れた。スペインの遺産を積極的に評価する流れはセビーリャ学派と軌を一にしているので取り上げるには及ばない。ここではナショナリスト的な研究動向について見ていくことにしよう。メヒコの場合、スペイン本国のそれと明確に識別されうる文化的なアイデンティティの源は、先スペイン期のインディオ諸文明に求められる。そこで、メヒコ革命以後の歴代政権はその文教政策においてインディオの文化的達成を称揚し、それを破壊したスペイン人の蛮行を非難するイデオロギーを注入してきた。これとは独立に、メヒコの知識人の間では自らの文化的遺産を構成する不可欠の要素として、アステカ、マヤなどに代表されるインディオ文明をとらえ、それを明らかにしていくための知的営みが積み重ねられていた。この二つの流れが合流し、1920年代に入るとメヒコの知的世界にはインディヘニスモと呼ばれる動きが確立したのである。それは人類学、社会学、言語学、歴史学、芸術などを包摂する一大潮流であり、また社会的に疎外されていたインディオを救い出そうという政治的な運動にも発展していくことになる。

メヒコの歴史学はこのインディヘニスモに依然として強く影響され続けている。またアメリカ合衆国の研究者の多くもこれに近い立場をとっている。彼らの功績は、征服者の歴史として語られてきたメヒコ史を被支配者の経験という観点から再検討を加えてきたことにある。書かれた歴史を殆ど残してこなかったインディオの生活世界を再構成するため、考古学、文化人類学などの知見を積極的に利用し、ここに歴史人類学的研究は飛躍的な発展を遂げた。しかしながら、この流れにも問題点がなかったわけではない。スペイン植民地統治を絶対悪と規定することにより、無自覚な価値判断、断罪が歴史的なプロセスを客観的に解明することを妨げる恐れがあるのである。セビーリャ大学の博士課程に在籍していたメヒコ人研究者はその典型であった。彼女はセビーリャ学派の真っ直中で必要以上に攻撃的になり、自らを感情的にインディオと同化してしまっていた。その研究成果にはまだ眼を通していないが、スペイン統治に対する空虚な非難の言葉がちりばめられていたとしても不思議ではない。実際、その種の研究はいまでも生みだされており、それらの中には記述的で、けっしてレヴェルが高いとはいいいかねるものが少なくない。セビーリャ学派と裏返しの危険がメヒコにも見られる、といえよう。

この危険を別にすると、メヒコの歴史学界には新たな発展に通じるであろう多様な契機が内包されているように思われた。自国の辿ってきた歴史的プロセス、とくにそれ以前は無視されてきた側面を解明するために最適な方法を探そうとする学問的態度が、欧米各国で進められてきた諸革新に対する鋭敏さを育ててきたことにその一因を見出だしえよう。その例としては人口動態に関する研究が挙げられる。メヒコのインディオ人口がスペイン人による征服以後激減したことは16世紀中には周知の事実となっていた。反スペイン主義者たちはこの人口減少を誇張し、スペイン人はこれを矮小化しようとしてきた。この不毛な論争に客観的な根拠を与え、“犯人”を確定するためにインディオ人口についての史的

研究は出発した。その後長い間、インディオのみが支払う義務を負わされていた貢租の台帳をもとにこの作業は進められてきたが、台帳に記載されているのは納税者数のみでありそこには自ずと限界が見えてきた。また年毎に増加していった非インディオ人口の動態を把握する必要も認識されるに至り、近年はフランスやケンブリッジの人口学派の新手法が取り入れられている。そして人口変動およびその地理的移動と社会・経済構造の間の相関などにも光が投げかけられ始めている。

メヒコ歴史学のもう一つの新しい流れは地方史的なアプローチである。このアプローチをとる研究者は、一定の空間で生起していた諸現象をいくつかの系としてとらえ、それぞれの系間に存在する連関を解明することにより、その空間を歴史的構造として理解していこうとする。これは地方の形成というプロセスを内在的に明らかにしていく点で、帝国の断片として地方というものをとらえていくセビーリャ学派の視点とは対極に位置しているといえよう。上で触れたイグナシオ・デル・リオ教授などはこの流れの旗手の一人である。帝国史に対抗するものとしての地方史研究は、特定の地方が組み込まれていた総体的文脈を見落とすことにつながることもありうるが、早急な一般化にながれがちであったメヒコ史研究に、より歴史的現実に近い多様な色合いを与えうるものとして評価すべきであろう。事実、ラテン・アメリカ史をめぐって行われた封建制－資本主義論争などでしばしば用いられた一般的な諸概念では捕捉しえない地域差や日常性のレベルまでもが浮き彫りにされつつある。

メヒコにおいて私の行った作業はメヒコ地方史を、その内在的な発展を無視することなく、スペイン帝国史、ひいては近代世界の形成過程というより大きな文脈の中に位置づけることにあったし、今でもその姿勢は変わっていない。これはセビーリャとメヒコに約一年ずつ滞在しえたことによるところが大きい。どちらか一方で二年間を過ごしたとすれば、私の見方は偏ったものとなっていたかもしれない。その意味で、セビーリャでの日々もメヒコでの月日もそれぞれの仕方で私の学問的営みの不可分の構成要素となっているといえる。しかし、いずれかを選べといわれたら、メヒコにおける経験が私のその後の研究生活にとっては決定的であったと答えるであろう。高層ビルの谷間をスペイン語ではない母語を話しながら歩き回っていた人たち。わずかな耕地で天水を頼りに黙々と農作業に従事していた人たち。そうした人たちは一様に浅黒い肌を持ち、その顔には辛い肉体労働と強い陽射しとによって深い皺が刻まれていた。彼らからすれば途方もなく豊かにみえるであろう日本に生まれ、留学までできたような私が、こうした人々との連帯、ましてや彼らとの同一化などを口にするのは偽善のきわみであろう。私の研究がいつか彼らが生活を向上させていくための一助となるだろう、などといって自分の贅沢を正当化するつもりもない。しかし、勝者のための歴史を書く必要を感じない私がメヒコ史研究を続けていく原点は、虐げられた人々も生きているこのメヒコ以外にはありえないのである。

(やすむら なおき・東京大学教養学部助手・メキシコ史)